

夏目漱石随筆選

第二集—過去の回想

目次

はじめに	五
第一章 文士漱石、日常生活を語る	九
文士の生活（九）／余と万年筆（二〇）	
元日（二八）	
第二章 漱石、ロンドン留学時を愉快に語る	三三
倫敦消息（三三）／自転車日記（八四）	
第三章 漱石、過去を回顧する	一〇七
僕の昔（一〇七）／私の経過した学生時代（一一七）	
落第（一三三）／処女作追懐談（一四四）	
第四章 漱石、修善寺の大患を回想する	一五四
思い出す事など（一五四）	

第五章 漱石、友人子規とケーベル先生を語る・・・三一九

正岡子規（三一九）／子規の画（三二九）

ケーベル先生（三三四）／

ケーベル先生の告別（三四四）

第六章 漱石の身边雑記的作品・・・三四九

初秋の一日（三四九）／京に着ける夕（三五五）

手紙（三六七）／変な音（四〇二）

はじめに

夏目漱石は、長編小説が有名ですが、随筆でもさまざまな作品を残しています。この第二集では、いくつかのジャンルに分けて収録しました。第一章の「文士の生活」は、作家漱石の日常生活（その中には世間の関心である収入のことなども含まれています）を愉快な口吻で語っています。「余と万年筆」は、普段愛用しているオノトへの思い入れを語ります。

第二章では、官費留学した英国での生活を、抱腹絶倒の筆致で語ります。下宿で主人夫婦に頼りにされたり、使用人の女のおしゃべりに辟易する様子を描く「倫敦消息」、初めて乗った自転車で坂を猛スピードで駆け下りて、壁にぶつかって転倒するなどの武勇伝を

語る「自転車日記」は、漱石のイメージとは違って、生き生きとした様子が伝わってきます。これらの作品は、帰国後の『吾輩は猫である』の筆致を彷彿させます。

第三章では、自分の生まれや親兄弟などについて語る「僕の昔」、かなりいいかげんで落第までした学生時代を回顧する「私の経過した学生時代」と「落第」、処女作である『吾輩は猫である』デビュー時の事情を語る「処女作追懐談」など、とても愉快的筆致の作品を収録しています。

第四章に収録した「思い出す事など」は、一九四三年（明治四三年）、大吐血を起こして生死の間を彷徨い、一時は危篤状態に陥った「修善寺の大患」の経過や当時の心境を振り返って綴った有名な随筆です。周囲の人々に対する感謝とともに、漱石のしみじみした心境を描いており、大患を境に「則天去私」の境地に達したといわ

れています。各所に、漱石作の漢詩や俳句が載っており、その意味でも貴重な作品です。

第五章では、学生時代からの親友の正岡子規について語った二編と、恩師ケーベル先生について回顧した二編を収録しています。

第六章では、身边雑記的な作品として、「初秋の一日」「京に着ける夕」「手紙」「変な音」を収録しました。

長編小説からイメージされる人物像とはまた違った、楽しげで陽気な漱石、しみじみとした素直な漱石を感じる事ができると思います。

なお、本書に収録した作品については、朗読オーディオブックを響林社より発売していますので、併せてお聴きいただければ幸いです。

※ 底本について

本書に収録した作品は、青空文庫に拠っています。制作したのはボランティアの皆さんです。なお、表記は原則として出典のままとしており、全体を統一しているわけではありませんので、ご了承下さい。

第一章 文士漱石、日常生活を語る

文士の生活

夏目漱石氏―収入―衣食住―娯楽―趣味―愛憎―日常生活―執筆
の前後

私が巨万の富を蓄えたとか、立派な家を建てたとか、土地家屋を
売買して金を儲けて居るとか、種々な噂が世間にあるようだが、皆
嘘だ。

巨万の富を蓄えたなら、第一こんな穢い家に入って居はしない。

土地家屋などはどんな手続きで買うものか、それさえ知らない。此家だつて自分の家では無い。借家である。月々家賃を払つて居るのである。世間の噂と云うものは無責任なものだと思ふ。

先ず私の収入から考えて貰いたい。私にどうして巨万の富の出来よう筈があるか——と云うと、ではあなたの収入は？と訊かれるかも知れぬが、定収入といつては朝日新聞から貰つて居る月給である。月給がいくらか、それは私から云つて良いものやら悪いものやら、私にはわからぬ。聞きたければ社の方で聞いて貰いたい。それからあとの収入は著書だ。著書は十五六種あるが、皆印税になつて居る。すると又印税は何割だと云うだろうが、私のは外の人のより少し高いのだそうだ。これを云つて了つては本屋が困るかも知れぬ。一番売れたのは『吾輩は猫である』で、従来の菊判の本の外に此頃縮刷したのが出来て居る。此の両方合せて三十五版、部数は初版が二千

部で二版以下は大抵千部である。尤も此三十五版と云うのは上巻で、中巻や下巻はもつと版数が少い。幾割の印税を取った処が、著書で金を儲けて行くと云う事は知れたものである。

一体書物を書いて売るといふ事は、私は出来るならしたくないと思う。売るとなると、多少慾が出て来て、評判を良くしたいとか、人気を取りたいとか云う考えが知らず知らずに出て来る。品性が、それから書物の品位が、幾らか卑しくなり勝ちである。理想的に云えば、自費で出版して、同好者に只で頒つと一番良いのだが、私は貧乏だからそれが出来ぬ。

衣食住に対する執着は、私だつて無い事はない。いい着物を着て、美味しい物を食べて、立派な家に住み度いと思わぬ事は無いが、只それが出来ぬから、こんな処で甘んじて居る。

美服は好きである。敢て流行を趁う考も無いし、もう年を取った

からしやれても仕方が無いと思つて居るので、妻の御仕着せを黙つて着て居るが、女などがいい着物を着たのを見ると、成程なるほどいいと思ふ。

食物は酒を飲む人のように淡泊な物は私には食えない。私は濃厚な物がいい。支那料理、西洋料理が結構である。日本料理などは食べたいとは思わぬ。尤も此支那料理、西洋料理も或る食通と云う人のように、何屋の何で無くてはならぬと云う程に、味覚が発達しては居ない。幼稚ようちな味覚で、油っこい物を好くと云う丈だけである。酒は飲まぬ。日本酒一杯位は美味うまいと思うが、二三杯でもう飲めなくなる。

其の代り菓子は食ふ。これとても有れば食ふと云う位で、態々わざわざ買つて食いたいと云う程では無い。煎茶せんちやも美味うまいと思つて飲むが、自分で茶の湯を立てる事は知らぬ。葎たばこは吸つて居る。一事止した事も

あつたが、莨を吸わぬ事が別に自慢にもならぬと思つたから、又吸
い出した。余り吸つて舌が荒れたり胃が悪くなつたりすれば一寸止
すが、癒なおれば又吸う。常に家に居て吸つて居るのは朝日である。値
段は幾らだか知らぬが、安いのであろうが、妻がこれ許ばかり買つて置
くから、これを飲んで居る。外に出て買う時に限つて敷島しきしまを吸うの
は、十銭銀貨一つ投ほうり出せば、釣つり銭せんが要いらずに便利だからである。
朝日よりも美味うまいか如何どうか、私には解らぬ。

家に対する趣味は人並に持つて居る。此の間も麻布あびぶへ骨董屋こつとうやをひ
やかしに出掛けた帰りに、人の家をひやかして来た。一寸眼ちよつとに附く
家を軒毎のきぐいに覗のぞき込んで一々点数を附けて見た。私は家を建てる事が
一生の目的でも何でも無いが、やがて金でも出来るなら、家を作つ
て見たいと思つて居る。併しかし近い将来に出来そうも無いから、如何どう
云う家を作るか、別に設計をして見た事はない。

此家は七間ばかりあるが、私は二間使つて居るし、子供が六人もあるから狭い。家賃は三十五円である。家主は外ほかとの釣合があるから四十円だと云つて呉くれと云つて居るが、別に嘘うそを云う事もないと思つて、人には正直に三十五円だと云つて居る。家主が怒るかも知れぬ。地坪は三百坪あるから、庭は狭い方では無い。然しかし植木は皆自分で入れたのだから、こんな庭の附いている家としたら、三十五円や四十円では借りられないだろう。植木屋と云うものは勝手なもので、一度手入れをさせたら、こつちで呼ばないのに、時々若い者を連れて仕事にやつて来る。物の一月余りもこちこち其処そこ辺をいじつて居る事がある。別に断わるのも妙だと思つて、何とも云わずに居るが、中々金がかかる。

私はもつと明るい家が好きだ。もつと奇麗きれいな家にも住みたい。私の書齋の壁は落ちてゐるし、天井てんじょうは雨洩あまもりのシミがあつて、随分穢きたい

が、別に天井を見て行つて呉れる人もないから、此儘このままにして置く。何しろ畳の無い板敷である。板の間から風が吹き込んで冬などは堪たまらぬ。光線の工合ぐあいも悪い。此上に坐すわつて読んだり書いたりするのは辛いつらいが、氣にし出すと切りが無いから、関かまわずに置く。此間或る人が来て、天井を張る紙を上げましようかと云つて呉れたが、御免ごめんを蒙こうむつた。別に私がこんな家が好きで、こんな暗い、穢きたない家に住んで居るのではない。余儀なくされて居るまでである。

娯樂と云うような物には別に要求もない。玉突は知らぬし、囲碁いごも将棊しょうぎも何も知らぬ。芝居は此頃何かの行掛り上から少し見た事は見たが、自然と頭の下るような心持で見られる芝居は一つも無かつた。面白いとは勿論思わぬ。音楽も同様である。西洋音楽のいいのを聞いたら如何どうか知らぬが、私は今までそう云う西洋音楽を聞いた事の無い為せいか、未だまだ一度も良い書画を見る位の心持さえ起した事は

無い。日本音楽などは尚更詰らぬものだなと思う。只謡曲丈ただけはやつて居る。足掛六七年になるが、これも怠なまけて居るから、どれ程の上達もして居ない。下しもがかりの宝生で、先生は宝生新氏である。尤なほも私は芸術のつもりでやつて居るのではなく、半分運動うなのつもりで唸うなるまでの事である。

書画だけには多少の自信はある。敢あえて造詣ぞうけいが深いというのでは無いが、いい書画を見た時許ばかりは、自然と頭が下るような心持がする。人に頼まれて書を書く事もあるが、自己流で、別に手習いをした事は無い。真ほんとの恥を書くのである。骨董こつとうも好きであるが所謂骨董いいじりではない。第一金が許さぬ。自分の懐都合ふところのいい物を集めるので、智識は悉無しつむである。どこの産だとか、時価はどの位だとか、そんな事は一切知らぬ。然し自分の気に入らぬ物なら、何万円の高価な物でも御免ごめんを蒙こうむる。

明窓浄机めいそうじようき。これが私の趣味であらう。閑適を愛するのである。

小さくなつて懐手ふたてして暮したい。明るいのが良い。暖かいのが良い。

性質は神経過敏の方である。物事に対して激しく感動するので困る。そうかと思うと、又神経遅鈍な処もある。意志が強くて押える力のある為めと云うのでは無かろう。全く神経の感じの鈍い処が何処どこかにあるらしい。

物事に対する愛憎あいぞうは多い方である。手廻りの道具でも気に入つたの、嫌きらいなのが多いし、人でも言葉つき、態度、仕事の遣り口くちなどで好きな人と嫌いな人がある。どんなのが好きで、どんなのが嫌いかと云う事は、何れ又記す機会いずがあらうと思う。

朝は七時過ぎ起床。夜は十一時前後に寝るのが普通である。昼食後一時間位、転寝うたたねをする事があるが、これを見ると頭の工合ぐあいの大変

よいように思う。出不精でぶしやうの方で余り出掛けぬが、時々散歩はする。俗用で外出を已やむなくされる事も、偶たまには無いではない。人を訪問に出る事はあるが、年始とか盆とかの廻礼などは絶対にしない。又する必要はないと考えて居る。

執筆する時間は別にきまりが無い。朝の事もあるし、午後や晩の事もある。新聞の小説は毎日一回ずつ書く。書き溜ためて置くと、どうもよく出来ぬ。矢張やはり一日一回で筆を止めて、後は明日まで頭を休めて置いた方が、よく出来そうに思う。一気呵成いっきかせいと云うような書方はしない。一回書くのに大抵三四時間もかかる。然し時に依ると、朝から夜までかかって、それでも一回の出来上らぬ事もある。時間が十分にあると思うと、矢張長時間かかる。午前中きり時間が無いと思つてかかる時には、又其の切り詰めた時間で出来る。

障子しょうじに日影の射した処で書くのが一番いいが、此家ではそんな事

が出来ぬから、時に日の当る縁側えんがわに机を持ち出して、頭から日光を浴びながら筆を取る事もある。余り暑くなると、麦藁帽子むぎわらぼうしを被かぶつて書くような事もある。こうして書くと、よく出来るようである。凡すべて明るい処がよい。

原稿紙は十九字詰十行の洋罫紙ようけいしで、輪廓りんかくは橋口五葉君に画いて貰ったのを春陽堂に頼んで刷らせて居る。十九字詰にしたのは、此原稿紙を拵こしらえた時に、新聞が十九字詰であつたからである。用筆は最初Gの金ペンを用いた。五六年も用いたろう。其後万年筆にした。今用いて居る万年筆は二代目のでオノトである。別にこれがいいと思つて使つて居るのでも何でも無い。丸善の内田魯庵君に貰つたから、使つて居るまでである。筆で原稿を書いた事は、未だ一度もない。